

て宗祖眼は叫ばねばならぬ要に迫られて叫ばれたのであると考へたい。

第一に就いて、東西分派後、餘乘の經論釋によつて宗義を領解せんとする傾向が多分に見出される。この傾向はやがて宗祖の教が自然に輕視せられんとする事態を招いたのでなかるうかと察せられる。斯る傾向を反省し、新しく宗祖の教を昂揚せんとする氣運が諸學匠の間に顯われ來つてゐる。私はこうした主張を圓智「祕密集」惠空「叢林集」如晴「眞宗癸疑鈔」等に見出す。

第二に就いて、學寮創建以來、大谷派學事は學寮を中心として次第に隆盛の途につき、遂に文化・文政の全盛期を迎えるのであるが、斯る宗學の進歩發展に伴つて異安心事件も次第にその數を増し、全盛期となればその件數は驚くべき數字となり、異安心者の提出する問題は各種各様に亙つてゐる。かく異安心の問題が複雑多岐となり行くのみでなく、宗學界に於て研究せらるべき問題もそれに平行してゐるのである。斯る事態に對處して諸學匠によつて宗祖眼が次第に強く叫ばれることになつた。諸學匠の著作に「宗祖の思召」「一家の定判」「祖訓」等、これに類する言葉の數が時代の下るに従つて次第に増しており、この一事を以てしても宗祖眼の叫びが次第に強くなつてゐることが知られるであらう。こうした宗祖眼の呼號とは逆に、諸學匠は餘經論に基いて、或は理論を驅使して、或は蓮師教學を基盤として、諸祖の教學の會通に、古義に對して新義の強調等、宗祖の教自體は次第にその影を薄くして行く様にみなされる。

第三に就いて、上述の如く全盛期の諸學匠は宗學に就いて種

々雑多な問題に直面してゐるのであり、異安心問題も亦、多岐に亙つてゐる。斯る事態を生む大いなる因として私は「御文」が學界にその姿を濃厚に顯わしたと、學界の定説が古義より新義への變遷せしこと、更には、高倉一轍思想の高唱等を擧げたい。從來、全盛期についてその隆盛のみが、物語られてゐるがこの時代ほど宗學が紛糾困亂した時代はないと思う。それ故、宗祖眼の呼號は幾多の問題を解決すべき必要に迫られての叫びであると考えたい。

聖德太子和讃に於ける一問題

松 見 得 忍

(一)

宗祖が太子を本願の弘宣者とせられたのはどういふ點についてであるか、どういふ意味でそういわれたのか、ということについて述べたい。

太子和讃には十一首のもの、七十五首のもの、百十四首のものとの三種がある。このうちまず十一首和讃について、之を分類すると、

- (一) 和國の教主としてその恩報を感謝しておられること
- (二) 太子のめぐみにより佛智不思議の誓願にあい住正定聚の身となれること
- (三) 太子が如來の悲願の弘宣者であること
- (四) 太子の佛教を末法なるが故に念佛としてうけとるとの意味でのべたもの

(四) 太子のめぐみは久遠劫來のものであること等に分けられる之等のうち、如來の悲願の弘宣者とせられしこと、之に關連する太子のめぐみの久遠劫來のものであることについて以下すこしく愚見をのべよう。和讃に

上宮皇子方便し

和國の有情をあわれみて

如來の悲願の弘宣せり

慶喜奉讃せしむべし

とある。この和讃に對する先輩の考えをみると、まず一乘院吉谷講師は、その講述に於て大體次のように述べておられる。太子の廟窟獨として御影にも記されている文には「大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、是故方便從西方、誕生片州興正法」とあり、この最後の句の「正法」というのは、要するに彌陀の本願である。従つて、太子はまた本願の弘宣者であると。又、如説院の管窺錄にもやはり「正法」すなわち、念佛と解しておられる。然し、この偈のみをもつて直ちに太子を本願の弘宣者なりとすることはいささか客觀性に乏しい。

(二)

次に久遠について考えよう。

久遠劫よりこの世まで

あわれみかむれるこの身なり (下略)

無始よりこのかたこの世まで

聖德皇のあわれみに (下略)

この太子の久遠説はどこから考えられたかという、當然太子は觀音の示現であり、また觀音は彌陀の化身であるとの考えに

もづくのである。之は七十五首和讃の四十二首目に、

「この像つねに歸命せよ、聖德太子の御身なり、この像ことに恭敬せよ、彌陀如來の化身なり」とあることから極めて明瞭である。「この像」とあるのは四十一首目に「阿佐太子を勅使にて、わが朝にわたしたまひし、金銅の救世觀音、敬田院に安置せり」とある金銅の觀音像を指すのである。即ち、宗祖には彌陀の久遠が考えられているから、その化身たる觀音も久遠であると考えられたにちがいない。

之について吉谷講師は「是は彌陀觀音同一體の慈悲に約して示したまふ理趣釋經(下3)得自性清淨法性如來者是觀自在王如來異名則此佛名無量壽」若於淨妙佛國土「現成佛身」住「維摩五濁世界」則爲「觀自在菩薩」とあり、亦密教にては東密にても台密にても皆彌陀觀音一體の異名とするなり、今は夫を一轉して觀音垂迹の太子慈悲も無始以來今世までの深き恵みなることを示したまふ。」と述べておられる。之に對し、如説院は「彌陀の一體に成就したまうところの智にはなれざるの悲を主どりて觀音とあらわれ、悲にはなれざる智を主どりて勢至とあらわれ給ふゆへに、此の二大士の本懷、ただ彌陀一體の德に歸せしむるにあり。」とのべ、更に「觀音勢至の悲智の二德を一體にする時は彌陀宛然たり」と述べておられる。この彌陀觀音の關係については、唯信鈔文意には「この無碍光佛は觀音とあらわれ、勢至としめす」とあり、口傳鈔中には「祖師聖人あるいは觀音の垂迹とあらわれ、あるいは本師彌陀の來現としめしますますことあきらかなり、彌陀觀音一體異名ともに相違あるべからず。」と示されている。従つて、觀音の垂迹たる太子ま

た、彌陀の本願を弘通し給う、と考えられたと思われるのである。

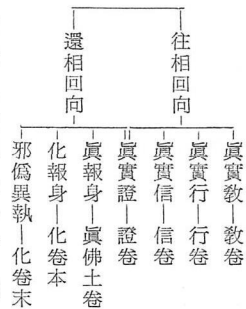
(三)

終りに太子の佛法を宗祖が念佛として受けとられた點に一言しよう。太子の佛法を宗祖が念佛と理解されたことについては廟窟偈によつて一應理解するとしても、前述の如く充分ではない。然し、ここに注意すべき和讃がある。即ち、七十五首和讃に「像法五百餘歳にぞ、聖徳太子の御よにして、佛法繁昌せしめつゝ、いまは念佛さかりなり」とある。この和讃の四句目に特に「この世は末法の世なり」と左訓を點ぜられてある。太子讃には殆ど左訓がないのであるが、特にこの一句に左訓を附されしことは注目すべきことであらう。之は御本書の教巻の最後に「時機純熟之眞教」とある御言葉と併せ考える時、宗祖の眞教という概念には時機純熟ということが内含せられてあるので極めて大切な點である。時機とは即ち左訓の「この世は末法の世なり」ということにはかならず。この様に考えるとき、太子を本願の弘宣者と歌われたことについての理解は、要するに太子の佛教、即ち正法は末法においては念佛として、之を受容すべしとの必然性にもとづくものである。

教行信證の構造

森 西 洲

第一形 往還二回向に二分する構造。



「往還」の語は、衆生の方に標準をおいての語であるが、「回向」は如來の回向であるから、眞化兩巻の所説も還相回向である。證巻の

煩惱成就凡夫……獲_二往相回向心行_一……住_二正定聚_一、故必至_二滅度_一。(證、一、一、二、一。この數字は拙著「のべがき教行信證」の篇章節項を示す。以下之に準ず)——(往相回向)。必至_二滅度_一、即是常樂……(證、一、一、二、二)——(證)然者、彌陀如來、從_レ如來生、示_二現報應化種種身_一也(證、一、一、二、三)——(還相回向)この「報應化身」が如來の回向であり、還相回向であり、眞化兩巻の所説である。

第二形 行巻を總論と見る構造。

